
流星

蒲公英

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流星

【Nコード】

N6962T

【作者名】

蒲公英

【あらすじ】

初恋の話を、君にしようと思う。星座もよく知らないのに、天体観測用の双眼鏡を持っている理由を説明してあげる。これを買ったとき、僕は中学校の二年生だったんだ。

懐かしい中学校の教室を思い出しながら、読んでいただけると嬉しいです。

プロローグ

寒い？じゃ、車から毛布を出しておいでよ。

ここにビニールシート敷くから、その上に。

そこに、紅茶のポットがあるから気をつけて。

え？今日は、肉眼でもたくさん見えるはずだよ。

ちよつと風が強いから、寒いけど。

そう、天体観測用の双眼鏡。

うん、ずいぶん年季が入ってるだろう？

中学校の時に買ったんだ、お年玉で。

あ、ほら、今流れた。

え？何か話すつて、何を？

星座の話とか、天文学の話とかはよく知らないんだ。

ただ星を眺めるのが好きただけだよ。

エピソード？ないことはないけど。

もう昔の初恋の話。

え？中学校の二年だったよ。

わかったよ、話すよ。妬くなよ？

夜の散歩

あの頃の僕は、常に何かに追われるように焦っていた。視線で人が殺せるならば、一日に何十人も殺していただろう。反抗期だからと一括りにされることも我慢できず、教師などは憎しみの対象ですらあった。

何に苛ついていたのか、今から考えると思うがままにならない自分に対してで、それは明らかに他者に向けてはいけない筈の感情だったが、まだ幼い思考の中にそんな余裕など無い。陸上競技で400mのタイムが伸びないのは顧問の指導がいい加減だからであり、期末試験の点数が落ちたのは塾の授業のレベルが低いからであり、家の自室が散らかり放題なのは部屋が狭いからであって、けして僕の責任では無かった。友達に、教師に、親に指摘される毎に僕の苛つきは跳ね上がり、責任の所在を自分以外の何かに転嫁することのみを考えていた。かと言って、学校や社会といったカテゴリーから道を踏み外す度胸などなく、自分の小さな巣穴で、傷付きたくない」と武装している気弱な獣に過ぎなかった。

武器は根拠もない小さなプライドのみで、その武器を磨くことすら考えつかなかったのだ。

その日も小さなことに気持ちがささくれだって、夜の散歩に出ることにした。家の中の生活の音、つまりテレビや洗い物の水音が邪魔な時、僕は外を歩くことにしていたから。

はじめの頃、どこに何をしに行くのかと喧しく尋ねていた母も、僕が一時間程度で家に帰ることが理解してくると、何も言わなくなつた。ずいぶん経ってから聞いた話だと、散歩から戻ったばかりの顔がいつも穏やかだったから、だそうである。後ろめたそうな顔をしていたら、力ずくでもやめさせるつもりだったと母は言っていた。親ってというのは、子供が舐めているほど洞察力が低い訳じゃない。

気がついていても言葉にしないってことができるだけだ。

ともあれ、その日もそうして外出して、大抵の時の目的地である小さな川の堤防に向かって歩いていった時だ。駅の方から来る道を曲がってきた白いコートの子にぶつかりそうになった。

「あ、すみません。」

反射的に詫びの言葉を口にしたであろう少女は、そのまま僕の名も口にした。

「あ、本多君だ。」

一瞬、誰だか思い出せなくて、僕はしばらく彼女の顔を眺めた。

「田中？」

同じクラスの中でも言葉を交わしたことはなく、存在さえも意識の外だったその少女の名をどうにか知っていたのは、彼女が学年でトップクラスの成績だったからだ。色白の古風な顔立ちで、黒い髪だけが印象的な彼女は、名前も古風で「田中さゆり」といったが、僕たちは影で「お菊」と呼んでいた。髪が伸びるお菊人形、「お菊」だ。

「塾からの帰り？」

そう聞いたのは、別に知りたかった訳ではなく、単純に間をつなぐ為だけだ。

「うん、本多君も塾？」

散歩だと答えると、こんな夜に散歩なんて、と笑った。

「夜の散歩ってなんだか楽しそう。私も一緒に行こうかな。」

家の中にうんざりして出るだけの僕は、楽しいなんて思っていない。遅くなると親に怒られるのではないかと尋ねると、家にはまだ誰

もいない、と返事が返ってきた。

「うち、ボシカテーだから。お母さんは今日、会議で遅くなるって言ってたもの。」

ボシカテーを母子家庭と漢字変換するのに時間がかかり、それが何故家に誰もいないことになるのか理解することにまた時間がかかり、つまり母親と二人暮らしなのだと思いついた時には、田中は当然のように横を歩いていった。

「夜歩くと、知らない道みたいで不思議。」

その時に、帰れと言えば良かったんだ。

帰ってくれよ

黙っていたら勝手についてきたので、僕はいつもの堤防まで歩いて行った。そしていつものように黙って腰をおろすと、田中も隣に座った。

これは僕のためだけの毒出しの儀式であつた筈なのに、隣に誰かが座っていることで放心することができず、その落胆をそのまま直截的な言葉にした。

「人がいると、疲れる。邪魔だから、帰ってくれよ。」

僕はまだ、意味が通じさえすれば、言葉の役割はそれだけでこと足りると思っていて、気を使う、空気を読む、は概念だけの認識が見事に上滑りしていた。不用意な言葉が相手を傷つける場合があると気がつかないほど自分が子供だつたと思い知る、僅か数十秒前の話だ。

夜目にも理解するほど怯んだ顔の田中は、それでも静かな声で僕に言った。

「ごめん。来るなつて言わないから、いいのかと思つて。帰るね。」

じゃあね、と手を振つた田中の白いコートが暗い夜道を頂垂れたまま歩いて行くのを、言い方が気に入らないのなら怒ればいいのと不貞腐れながら見送つてから気がついた。

「怒らせた」のではなく「傷付けた」のだ。

その夜、僕の目には白いコートの背中が焼き付いて眠れず、翌朝に学校に着いたら教室の女子が僕を酷いやツだと言ひ募るのではないかと不安で、憂鬱を感じさせた田中に、また腹を立てた。女子はしよつちゆう他人の噂話をしているし、きつと朝には田中が教室で僕に傷付けられたと被害者ぶつた顔をしているだろうと想像したので、登校途中の僕は、普段に増して苛つき神経を尖らせていた。

結果的には田中は触れ回つたりせず、ただ僕のほうをちらりと怯

えた表情で見ただけで、いつもと変わらない物静かで落ち着いた様子でいる。たいしたことではなかった、あのくらいのことには誰でも言うだろう、そう思うと前夜の後姿が浮かび、落ち着かなかったのは僕のほうだった。

着席した時に、机の上に鉛筆で薄く書いてある文字に気がついた。きのうはごめんなさい たなか

教室の隅で、女子の声が聞こえた。

「さゆり、眠そうじゃない？」

「うん、お母さんが昨日帰ってきたのが十二時過ぎだったから。」
彼女は昨晚、あの表情のまま暗い部屋に入り、そんな時間までひとりでいたのだろうか。少しだけ罪悪感を持ちながら、僕は消しゴムで机の上の文字を消した。

進路希望

さて、二月に入るとすぐに、学校から渡されたプリントは「第一回進路希望調査用紙」である。まだ高校受験などまったく遠いことで、高校のレベルなど塾からの情報をナナメ読みするくらいの切迫感のまるでない生徒たちがざわめくと、教師は家で相談して来いと話を切った。

その中でひとり、即座に提出した女子がいた。田中だ。教師は用紙を見て、少し驚いた顔をした。

「ここは、遠いぞ。学区外だ。レベルも県内ダントツだが、親と相談しているのか。」

間髪をおかず、田中は答える。

「そこに、行きます。」

どこだった？県立K高だったさ、どこ？そこ、頭いいヤツは違うねーと教室がまた少しざわめき、教師がプリントを戻そうとしながら言った言葉を、田中は遮った。

「行きますって言っても、決めるのは高校のほうだから。まあ、希望は希望だが親ともう一度」

「私は、その学校にしか行きません。」

普段の存在感の薄い、どちらかと言えば控えめな田中には珍しい、強い口調だった。

その週の土曜日、部活帰りに友達とスーパーマーケットの休憩所で鯛焼を頬張りながら、最大のレクリエーションである教師の悪口と女子の品定めについて、盛大に語り合っていたときの事だ。進路希望をどの学校で出したのか、ひとしきりまた盛り上がった時、成績がトップクラスにある一人が思い出したように言った。

「お菊ってさ、自分で頭イイと思ってるんじゃない？行きたい、じやなくて行きますだってさ。すごい自信だよな。」

僕は進路についてなんか考えたこともなかったもので、塾の点数と照らし合わせて行けそうで無難な受験先を記入しただけで、他の学校に関する知識は無かった。

「お菊の言ってた学校って、そんなにすごいの？」

そう聞いてからはじめて、その学校が明治から伝統のある有名校で、僕の家からだと同様に2時間近くかかることを知ったくらいだ。ただぼんやりと、通学時間が大変な学校をわざわざ選ぶ理由はランクだけではなく、他の何かがあるのだろうなと思ったが、何か理由があるんじゃないのか、なんて言ったらヒヤカシの嵐だ。

夜の散歩の習慣は相変わらず続いていたが、知った顔に合わないように注意深く道を選ぶようになった。しかし、堤防に続く道はそう多いわけではなく、クラスの誰がどこに住んでいるのかなんて把握しているわけでもなく、僕はまた、塾帰りの田中とばったり会ったのである。

「また、散歩？」

笑いを含んだ声に幾分安堵したが、今回は先手を打たなくてはならない。

「おう、ついて来んなよ。」

自分ながら気負った声が出たのが恥ずかしく、僕は視線が合わないようにわざとあらぬほうを見ていた。

「今日は、お母さんが家にいるから寄り道できないもん。」

ああ、母親とふたりだったのだと思い出して、ふと、父親はどうしたのだ、と聞いた。

「六年生の時、死んだ。」

それは影を落としたような声で、僕がまた無神経なことを言ったのだと悟るには充分だった。けれど、彼女は少なくとも僕よりは大人で、もう一度声を発した時は、意識して明るい口調だった。

「ねえ、この間の場所、星が見える？」

星はここでも見えるじゃないかと答えると、街灯が明るすぎて見えにくい、と言う。

「流れ星が見たいの。」

どこか遠くを見るような視線だった。

存在を意識する

教室での田中は控えめで、成績が良い以外にはさしたる特徴のない女の子だ。「お菊」のニツクネームに象徴されるように、その落ち着いたおとなしやかな態度は僕たちが普段、品定めする女子の中に入れるには、ふさわしくない。だから、僕は田中がどんな女の子で、どんな話をするのか、まったく知らなかった。興味がなかった、と言っのが正しい。

ただ、2回のやりとりの中で、彼女が僕よりも随分大人びていることに気がつき、僕の目は自然と田中の存在を意識するようになった。

そして、彼女がとても綺麗だということに気がついたのだ。

田中は綺麗だと気がついたところで、中学生にできることなんて無い。仲良くなるうなんて言える筈もなく、気にしていることを周りに悟られないようにすることだけが精一杯で、視線の持つていきようにも気を配る始末だ。田中の小さい顔や黒すぎる髪が目に入らないように、言葉を交わす機会があれば、なるべくそっけなく聞かせるように、それだけを心がけた。そして、嫌われていないか、傷付けていないかとこっさり表情を窺うのだ。それは、大人になれば実に迂遠でもどかしい感情だが、その時にできることはそれだけだった。何人かの友達は女子と「付き合って」「はいたが、昼休みに話をするか一緒に帰るくらいのこと、それ以上の何かがあるわけでもなく、せめて休みの日の公園を一周するのが関の山である。だから僕は、授業中の彼女の発言に耳を澄ませ、休み時間の他愛ないやりとりが聞こえる席で、田中がそこにいることを強く感じていただけだ。それが女子たちのいうところの「片想い」の状態である、ということに気がつくのは、もっと後の話になる。

ある日のこと、ノートを購入しようと寄った文房具店で、珍しいものを見た。文房具店に置くにしては、ずいぶん丈夫そうな箱に書いてある文字は「天体観測用双眼鏡」だ。地球儀やローロデックスと一緒に並べられた箱に興味をそそられ、手に取った。普通の双眼鏡や天体望遠鏡との違いについてはよくわからないが、夜の散歩に持ち歩けることがとても魅力的に思え、金額を確認した。

二月も半ばになっていて、お年玉の使い残しはかなり薄くなっていたが、頼めば母から若干の補助を期待できる程度の金額だった。いざとなったら、翌月の小遣いを前借りしてもいい。

三日間考えた末に、僕はそれを手に入れた。母は、夜に手ぶらでうろつかれるよりも恰好がついていい、と笑ってから幾分真面目な顔で、それで覗きをしようなどと思っではいけない、と僕に釘を刺すのを忘れなかった。信用されていないことにおいては、多かれ少なかれどこの家庭も似たようなものだ。

約束じゃなくても

新しい玩具を見せびらかしたくなるのは、子供の常である。しかし悲しいことに、僕のまわりには星を見ることに興味を示す友達などいなかったのだ。まして、夏ではなく真冬のことでも星を見るために誘いあうような話にもならず、モノズキの烙印まで押されそうになって慌てて話を引つ込めた。夜に散歩をするなんて、もともと誰かに話したことはなく僕と田中しか知らないことだったから。

そうだ、田中だ。

流れ星が見たいと言った田中なら、天体双眼鏡を知っているかもしれないし、関心を持ってくれるかもしれない。邪魔者扱いして追いついたことなどすでに忘れたことにして、高い棚の上にあげるこ都合主義だと自分でも気がついてはいたが、そこは幼い心理だと理解して欲しい。

塾帰りの田中と偶然を装って出会うために、何度か無駄足を踏んだ。教室で田中に話しかけるには、僕があまりにも自意識過剰になつていたので。今でこそ携帯電話なんて本人に直接連絡の取れるツールが発達しているが、当時はそんなものは無かつたし、女子の家に電話することは、とても考えられることじゃなかつた。無駄足を踏んでいるうちに、僕の双眼鏡の扱いは少しずつ慣れ、ピントを合わせることも容易になつていった。

2年生最後の期末考査は間近に迫り、塾の試験対策で毎日、自習室が特別開放されるようになった頃、塾帰りの僕と塾帰りの田中は学校以外の場所でやっと顔をあわせた。お互いに通塾する友達が一緒におり、気安い状態だったことが幸いして何人かの集団になつた。僕は苦心しながら少しずつ田中に近づき、まるで今思い出したかのように話を切り出した。

「最近、天体双眼鏡買ってさ、月のクレーターなんか近く見えるんだ。」

「こんな寒い時期に夜、散歩するのなんて本多君だけだよ、と田中は笑った。

「望遠鏡なら、あるんだけどな。組み立てるのが大変だから、使っていないの。」

「今、使っていないのなら、使っていたのはきっと彼女の父親だったのだろう。」

「双眼鏡なら、持って歩きやすくていいね。今度、気が向いたら見せて。」

気が向いたら見せて、なんて約束の言葉でないことは、僕にだって理解できた。大人の言葉ならば、お愛想を言うってヤツで、本気の言葉でないとは理解していても尚、気持は浮き立つ。

「今度、また夜に会ったらな。」

僕の夜の散歩は、この言葉を発した瞬間から、自分の苛つきを遣り過ごすものでは無くなった。田中の顔を見るための言い訳になったから。

期末考査で、田中は学年トップだったらしい。僕については、言いたくない。学校から配られた、順位の記載されたペーパーに自分で親の確認印を押し、個人控え分は千切って学校のトイレに流してしまった、とだけ言うておく。これは通知表をもらった後にバレて、親と大喧嘩をする材料になるのだが、また別の話である。

とりあえず、彼女は目標に向かって着々と準備を進めていて、休み時間に読んでいる本すら、芥川龍之介や太宰治のような国語の試験に使われやすい小説になっていた。その間に僕がしていたことは、田中の表情を窺い彼女を綺麗だと思っっていることと、400mのタイムが伸びなければ長距離に転向しろと陸上部の顧問に言われて不貞腐れたことくらいで、相変わらず自分にできることが何か、なんて考えもしなかった。

成績が良いヤツは生まれ持って頭が良く、足の速いヤツは努力しなくても足が速い。だから、僕に向いている何かがあるのだろう、と考えていただけだ。僕に向いていることさえ見つかれば、努力せずには抜きん出た成果が得られるように思っていたのだ。平凡な両親の作る平凡な生活に価値を見出すことはできず、それを維持するためにも努力が必要なことには、気がつかなかった。

約束になる

もう2月も終る日、今日も田中には出合わなかった、と歩く道で背中から声をかけられた。

「また、散歩？飽きない？」

白いコートが早足で近付いてくると、僕の鼓動は早くなった。田中は僕の胸の双眼鏡を指差し、あ、それ？と聞いた。首から外して渡すと、双眼鏡を目にあて、頤を持ち上げながら手慣れた様子でピントのダイヤルを調節した。

「そんなに倍率は高くないんだね。」

ダメ、ここじゃ他の光が入っちゃう、と言いながら田中が僕に双眼鏡を戻すまでの僅かな間で、僕は彼女の細い首から視線を引き、がすのに大変な苦勞をしなくてはならなかった。

「川まで行けば、見えるよ。」

ここで、この前はごめん、一緒に行こう、とはとても言えない。

「また怒られたら帰り道が怖いから、やだ。」

田中は笑いながら言ったが、もう詫びる機会なんて、とうに逃しているのだ。

「変質者がいたらどうしようって思ってたんだよ、あの時。」

僕の失策は、邪魔者扱いしたことだけではなかったのか。怖いの意味は性別によって違うものなのだと、はじめて気がついた。

「もう、怒らない。使わせてやるよ、天気がいい日に。」

僕の声は、僕にだけわかる程度に上擦っていた。

8時まで家に帰れば怒られない、と言う田中と待ち合わせたのは、その週の土曜日だった。出掛ける前に、僕はとてもそわそわと落ち着かなかつたらしい。母に、女の子と一緒に帰りは送りなさいよ、と声をかけられた時は思わず絶句した。親は一体、どこまで子供の行動を読んでいるんだろう。やはり後になって聞いた話だが、

受け答えが上の空だった上に、珍しく鏡を覗きこんでいたそうである。8時には帰ると言う言葉もキーポイントだったと言っていた。そう言えば、帰宅時間を家に言っておく習慣はなかった。大人を甘く見てはいけない。

ただ、並んで

僕は今度こそ細心の注意を払い、知った顔に合わないように待ち合わせた場所へ出かけた。三月の六時半はもう暗くなっており、晴れた星空に刷毛を一筋いれたような雲が浮かんでいた。田中はまだ到着しておらず、堤防に腰掛けた僕はひとりで川を眺める。

少しだけ早く打つ脈を持って余し、いつそのこと田中が来なければ良いのと思った頃、足音を忍ばせるように歩いてきた彼女が、間をあけた隣に腰を掛けた。

「家がならんでる所よりは、星がきれいに見えるね。」

どう返事したら良いのか困り、ぼくは無言で双眼鏡を差し出した。田中は口数が多いとはとても言えないし、僕は言葉に詰まって会話ができずに、ただ、並んでしばらく空を見上げていた。

「流れ星の見つけ方、知ってる？」

知らない、と言うと、田中は僕と空を等分に見ながら言った。

「空をね、いくつかに分けて、決めたところだけを見続けるの。そうすれば、ひとつくらいは流れるから。」

「高校生になったら、天文部に入るの。」

田中は空に目を向けたまま言った。

K高校に天文部はあるのか、と聞くとこくりと頷いた。

「屋上に小さい天文台があつてね、そこにお父さんの名前がある。高校生の頃、部長だったんだって。」

田中が追いかけていたものは、それだったのか。父も母も健在である僕にはわからない感情。

「私は、高校生のお父さんと同じ場所で星を見るの。」

だから今、そのためにできることをする、と力強い口調で続けた。教室で、K高校への進路希望を教師に決然と提出した時と同じように。

「次の流星群の時は、一緒に観測に連れてってもらおう約束してたの。」
約束を破られて、もう新しい約束なんかできなくて、と続ける彼女の声は潤んでいた。

泣いてもいいと言ってやれる大人ならば、どんなにか良かっただろう。黙って一緒に空を見上げることしかできない僕は、やはり子供でしかないのだ。

瞬間、東の空に小さな光が尾をひいて流れた。生まれて初めて見たそれに目を奪われ、僕は小さく息をのんだ。

「見た？」

「うん、見た。」

3度の願い事どころか、願い事を思い出す暇もないほどの一瞬に、ただ光って消える。そのあまりの儂さを、もう一度確認するかのように空を見続ける田中は、本当に綺麗だった。

黙ったままの時間は思ったよりも早く過ぎ、どちらからともなく立ち上がって帰途に着いた。母に言われたとおり、人通りの多い道まで田中を送る。

「今日は、ありがとう。暖かくなったら、今度はみんなで行くからね。」

みんなで、という言葉に少し落胆しながら、次の約束ができたようで嬉しかった。少し、星座のことや星のことも覚えようと思ったことも、覚えている。

一緒に星を見上げる機会は、もう訪れることは無かった。

別れも告げずに

「お菊が転校するらしいぞ。」

田中と同じ小学校だった友達がそう言ったのは、星を見に行つた日から一週間も経っていなかった。

「俺の母ちゃんが、お菊の母ちゃんから聞いたんだって。」

ガン、と頭を殴られたような衝撃音が聞こえた。田中はあの時、今度は、と言つた筈だ。田中の祖母が病気になり、田中の母は実家に帰ることにしたらしい。友達の声をも、頭上の斜め上から降つてくる別の音のように聞きながら、別のことを考えていた。

僕は田中のことが好きだったのか。

次の週には、田中が転校することが教室中に知れ渡り、女子は田中の席に集まりがちになつて、会話の内容は、僕の席にも漏れ聞こえた。引越し先は県内だがずいぶん遠いので、母親の仕事先が変わるらしいことや、祖母の家は古い農家のようなつくりで夜が怖いなんてことなどを、淡々と説明している。教室で目立たない田中に積極的に声を掛ける男子はいないので、僕は女子の話の内容を聞き逃さないように、注意深く耳を傾けるしかなかった。

受験は？うん、行きたいところ、少し近くなるんだ。そっか、さゆり頭いいもんね。

いつ引越し？春休み中。その前にクラスの人たちで集まるうよ。

最後に田中を見たのは、三月ももう終わりの、桜がほころびかけた公園だった。クラス有志の「お別れ会」は控えめな田中にふさわしい控えめな会で、春の強い風の中にビニールシートが飛ばされる騒動を除けば、ただの雑談に終始するものだった。田中から少し離れたところに立ち、僕は田中を目で追っていた。連絡先を聞くこともなく言葉を交わすことすらなく、別れを告げることもせずに。

夕方に散会した後、僕はひとりで堤防に向かった。

ここで、並んで星を見ていたのに。もう、顔を盗み見ることもできないのか。自分が哀れに思えてきた頃、田中の横顔が浮かんだ。

だから今、できることをする。

田中の会いたい人は、田中の前にはもう現れない。死んでしまったから。どうしようもなくとも、自分が何かしなくてはならないのだとしたら。

僕が今、できることは何だろう。

曇った星の見えない空を見上げて、僕は考え始めた。

エピソード

え？これでおしまいだよ。

初恋は実らないものだもん。

これだけ。

聞いたことのない話だつて？

そりゃそうさ、誰にでもする話じゃないし。

今日？オリオン座流星群だよ。

忘れてたんだろう？

ひとつのことに夢中になると、ほかのことが見えなくなる。

そういうところ、変わってないね。

ね？天文部の元部長さん。

今年の同窓会のお知らせ、おかしいと思わなかった？

卒業してない学校からの葉書。

僕が幹事だったんだ。

名簿作ってたら、どうしても会いたくなって。

良かったよ、担任と年賀状のやりとりしてくれて。

連絡先がわかったときは、嬉しかったよ。

うん、知らなかっただろ。

良かったよ、また一緒に星が見られて。

f i n .

流星前夜

懐かしい中学校の空き教室を借り、同窓会事務局宛の葉書を整理した。校庭からは部活動のために登校した生徒たちの、走り回る声が聞こえる。蝉の鳴き声は弱くなってきている。夏が、終わろうとしていた。

卒業から十年目を迎える年で、引越した人間もできる限りの情報を集めて案内状を送ったので、例年より出席者は多いはずだった。僕が探していたのはひとつの名前で、当時の担任が年賀状をやり取りしていると住所を教えてくれたのだ。

葉書には、出席に丸がついていた。田中さゆりと几帳面な文字で名前があり、楽しみにしていますと書き添えてあった。

苗字は変わっていないんだね。白くて小さな顔と黒い髪は、どんな風にならっただろうか。まだ、星を見上げているだろうか。

たった一度、並んで流れ星を見ただけ。君はもう忘れてしまっただろう。僕だって担任が差し出した何枚かの葉書を見るまで、忘れていたんだ。僕の初恋は君だったけど、君があ頃僕をどう思っていたのか知らない。ただ、思い出したら控えめで意志の強い君が、今どうしているのか知りたくなった。

希望の高校には行けたかい？誰かに恋したり、傷ついたりもしたんだろうな。どんな女の人になってるんだろう。やっぱり「今、できることをする」って言うてるのかな。僕はまだ、中学校の時と同じ場所に住んで、夜に散歩したりしてるけど、流れ星はあの後に見つけたことないんだ。一緒に座った土手は、ずいぶん明るくなっってしまった。今は星の観察は難しいんだよ。

同窓会の出席者名簿を他の幹事たちと作りながら、僕は田中にだ

け話しかける。葉書を仕分ける音、確認の声、校庭を抜ける耳鳴りのような風の音。僕は今、急激に伸びた細長い手足の動かし方もぎこちない中学生だ。

僕を覚えているだろうか。会ったら、一番先に言う言葉は。

会場のホテルは華やかに飾られ、集まった顔を見るたびに中学生の面影を探す。それぞれが今浦島になり、再会を喜びあう。

おまえ、老けたな。

結婚したんだって？

なんだよ、まだ学生かよ。

さまざまな言葉が飛び交う中で、女子の一団から一際晴れやかな声上がる。

えーっ！さゆり？元気だった？

黒い髪はそのまま美しく、やはり控えめな気配の田中が中心で微笑んでいた。僕の視線は吸い寄せられ、彼女の視線と絡むまで動くことができなくなつた。田中は大きく目を見張り、ゆっくりと僕に向かつて微笑んだ。

「本多君？私のこと、覚えてる？」

一番先に言うはずだった言葉は吹き飛び、中学校の制服を着た僕が美しく成長した田中の前に立っていた。

一次会で殆ど話すことはできず、二次会に向かう道すがら田中の横に並んだ。

「K高校の天文部に入ったの？」

田中は驚いた顔をしたあと、部長を務めたと笑った。

「本多君と星を見たことがあったね」

覚えていてくれたことが何にも増して大事なことに思えて、僕は

繁華街の明るい夜空を見上げた。

「また、一緒に星を見に行かない？田中の家まで迎えに行くから」
「そうね、誘ってくれたら」

連絡先を交換して、同窓会が終わった。

オリオン座流星群のニュースを車のラジオで聞いた。

僕は、今から田中に電話をかけようと思う。

f i n .

流星前夜（後書き）

最後までお読みいただき、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6962t/>

流星

2011年6月7日23時10分発行